(1)
24589号　奈良新聞　H27年8月24日　平成27年（2015

「持経宿」を大修理

再興の道さらに未来へ

登山愛好家ら　寄付募り作業完了

大峯奥駈道の避難小屋

"平成の大修理"が行われた「持経宿」と新宮山彦ぐるーぷのメンバー＝7月26日、十津川村

世界遺産の大峯奥駈道（おくがけみち）を歩く山伏や登山者が利用する避難小屋「持経宿」（十津川村白谷国有林内）で"平成の大修理"が行われた。築36年で老朽化していたが、奥駈道の南半分を復興整備したボランティア団体「新宮山彦ぐるーぷ」（川島功代表、約60人）が個人・団体に寄付を募り、修理を完成させた。（木之下伸子）

▽南奥駈道復興

持経宿は昭和54（1979）年、和歌山県田辺市出身の鉄工商、故・前田勇一さんが建設した。明治政府による修験禁止以来、やぶに埋もれてしまっていた南奥駈道45キロ（太古の辻―熊野本宮大社）の復活物語は、ここから始まる。

前田さんは熱心な修験の行者で、南奥駈再興を発願したが、その2年後に逝去。和歌山県新宮市の玉岡憲明さん（90）のもとに登山愛好家が集う「新宮山彦ぐるーぷ」が遺志を継いだ。背丈ほどの高さに生い茂るクマザサを刈り、昭和59（1984）年から3年がかりで道を開いた。その後も整備は続けられ、台風などの後は資材をかついで登り、道の修復作業などに当たる。持経宿の管理も引き継いでいた。

▽改修工事

持経宿は釈迦ケ岳（標高1800メートル）の南約10キロ地点にあり、年間約200人が宿泊利用している施設。延べ床面積約41平方メートルの木造吉野建てで、いろりで暖を取ることができ、緊急時の水や非常食も置かれている。

ただ、長年の風雪で床や内外の壁が足元から腐り、倒壊が心配される状態となり、昨年から新宮山彦ぐるーぷが働きかけ、十津川村の木材提供や県内外の修験道関係寺院の大口寄付が決まった。

山での作業が始まったのは5月下旬。メンバーが木材を運び込み、6月からは新宮市の大工棟梁（とうりょう）が数日間の泊まり込み作業を繰り返して、ほぼ全面的に改修した。その後、メンバーで塗装や薪（まき）小屋の建設、隣接するお堂の修理などを行った。総工費は約450万円。メンバーやこれまでの山小屋利用者、寺院関係など230個人・団体の寄付金で賄われた。

▽登山者増加願う

一昨年、玉岡さんから代表を引き継いだ川島さん（74）＝三重県紀宝町＝は「資金も技能も、本当に多くの方に力を貸していただいた」と感謝。事務局長の沖崎吉信さん（67）＝新宮市＝も「山彦の活動はここから始まった」と感慨ひとしおだ。

前田さんや玉岡さんと一緒に再興前の南奥駈を歩いた新宮市の山上皓一郎さん（85）も持経宿の修理作業に汗を流していた。「あの荒れた道が、まさか世界遺産になるとは思わなかった」と振り返る。

「紀伊山地の霊場と参詣道」は平成16（2004）年、世界遺産に登録された。

人が踏めば道は残る。山上さんは「山小屋が整い、登山者が増えてほしい。この道がまた未来につながるから」と願う。「そうだな、山を拝むような気持ちで歩くことが大事だな」と話した。